

7/20 SAT. 21 SUN.

ヨハン・シュトラウスⅡ世 (1825～1899)

芸術家の生涯 作品316

2019年の<ウィーン・フィル ニューイヤー・コンサート>でも演奏されたワルツ王ヨハン・シュトラウスⅡ世の傑作で、近年は「芸術家の生活」と表記されることも多い。「美しく青きドナウ」とほぼ同時期に初演された。その“ドナウ”と対を成すシンフォニック・ワルツで、古き良き時代の楽都では、踊りたくなるワルツの筆頭でもあった。

ヨハン・シュトラウス2世は19歳を迎えようかという1844年10月、シェーンブルン宮殿近くのカジノ・ドムマイヤーで「バンドリーダー・デビュー」を飾る。カフェ・レストランを併設した舞踏会場兼コンサートホールのカジノ・ドムマイヤーは、前年に亡くなったウィンナ・ワルツ発展の大功労者ヨーゼフ・ランナーや、ランナーのライヴァルでもあったヨハン・シュトラウス父の拠点。ウィンナ・ワルツの聖地だった。

ジュニアはそこで成功した。名物新聞記者フランツ・ヴィーストが数日後、歴史的なコラムを書く。「おやすみランナー、こんばんはヨハン・シュトラウスお父さん、おはようヨハン・シュトラウスの息子」。

新時代の始まりだ。華やかなワルツ・メドレーばかりでなく、序奏とコーダ(終結部)にも意匠を凝らした2世のウィンナ・ワルツに、人々は熱狂した。彼は、一晩に舞踏会をいくつも掛け持ちするほどのスターとなる。

しかし「芸術家の生涯」が書かれた1867年冬の舞踏会シーズンは、例年と事情が異なった。前年の夏、オーストリアがプロイセンに敗北。舞踏会の多くも自粛を余儀なくされたのだった。そんな暗い世相にこそ音楽を、というのがウィーンのお家芸か。伝統と格式を誇る楽友協会や、1850年代から活動しヨハン、ヨーゼフ、エドゥアルトのシュトラウス3兄弟も関わっていた芸術家協会<ヘスペルス>(宵の明星という意味をもつ)の有志が立ち上がる。聴き手に潤いや喜びをもたらす「芸術家の生涯」はその<ヘスペルス>舞踏会で初演、彼らに献呈された。

奥田佳道 TEXT by Yoshimichi Okuda

作曲：1867年

初演：1867年2月18日ウィーン、ディアナザールでの「宵の明星」舞踏会

編成：ピッコロ1、フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、バストロンボーン1、ティンパニ、弦5部

ジェルジ・リゲティ (1923～2006)

レクイエム

作曲家ジェルジ・リゲティによれば、この《レクイエム》は「死者のための完全なミサ曲ではない」。確かに音楽史上数多くの《レクイエム》とは一線を画した聴覚的印象を受けるだろう。声明のような静的な響きが特徴的な〈入祭唱〉では、合唱の各声部はたがいに曲がりくねり、絡みあうように動いてゆく。この手法をリゲティは「マイクロポリフォニー」と呼んだ。〈クリエ〉では「マイクロポリフォニー」はさらに発展し、あたかも対位法的な建築物のようになる。5声からなる主声部はそれぞれが4声に分かれて20声部となるが、これは4つの声部からなる音の糸玉のようなものである。〈審判の日〉は作品の中核をなす重要な楽章であり、先立つ2つの楽章とは極めて劇的なコントラストをなしている。大合唱とオーケストラ、そしてソリストの声部が突然入れ替わるドラマティックな性格の音楽は、後のオペラ《ル・グラン・マカブル》を予告するものでもある。〈ラクリモーサ〉は、遠く離れた地点からこれまでの音楽的な出来事が回顧されるかのように響く。合唱は沈黙し、〈イントロイトゥス〉が一瞬ほめかされる。

リゲティの家族と親族は、第2次世界大戦中にユダヤ人としてその大半が殺された。リゲティ自身も労働奉仕として召集され、何度も死に直面した。弟子たちへのレッスンの際に、ごくまれに「ある日、毎朝義務づけられた行進が、身体がつかなくてできず、もう死んでもいいと思って横たわっていたその日に終戦が近いと聞いた」「ハンガリーから亡命した時には、数時間泥沼を這いつくばって国境を超えた」と話したこともあった。しかしリゲティは、いつも「作品はイデオロギーではなく、音楽そのもので勝負しなければならない」と語っていた。これらの経験は彼の中に深く内在するものであり、《レクイエム》の世界はそこから鳴り響いてくるものなのである。〈クリエ〉の一部は作曲者への断りなしに映画『2001年宇宙の旅』に用いられ、リゲティの名前を世間に浸透させたことでも知られている。

たかの舞例 TEXT by Mari Takano

作曲：1963年～1965年

初演：1965年3月14日 ストックホルム、スウェーデン放送局コンサートシリーズ“Nutida musik”にて
ミハエル・ギーレン指揮、リリアーナ・ボーリ(ソプラノ)、バルフロ・エリクソン(メゾソプラノ)、エリック・エリクソン合唱指揮、スウェーデン放送合唱団、オラトリオ合唱団、スウェーデン放送交響楽団

編成：独唱(ソプラノ、メゾソプラノ)、混声合唱、フルート3(ピッコロ持替2)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)クラリネット3(小クラリネット持替1、バス・クラリネット持替1、コントラバス・クラリネット持替1)、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット3、バス・トランペット1、トロンボーン3、コントラバスチューバ1、大太鼓、小太鼓、タムタム、タンバリン、ムチ、シンバル、シロフォン、グロックンシュピール、ハープ1、チェレスタ、ハープシコード、弦指定[12・12・10・8・6]

7/20 SAT. 21 SUN.

トマス・タリス (1505頃～1585)

スぺム・イン・アリウム (40声のもてつ)

トマス・タリスはイギリス・チューダー朝の時代の音楽家である。英国国教会の中心地カンタベリー大聖堂などで活躍した後、王室礼拝堂の音楽家となり終生この職を務めた。タリスが生きた時代のイギリスは激動の時期であった。ヘンリー8世(在位1509～47)の離婚問題を契機に始まった宗教改革は、メアリー1世(在位1553～58)の時にはカトリックへと戻り、エリザベス1世(在位1558～1603)の時代に再び英国国教となった。社会状況が変わるたびに反体制側の教会は解散・財産没収され、音楽家もその職を失うなどの影響を被っていた。しかしタリスは、カトリック教徒であったにもかかわらず、生涯王室礼拝堂での地位を全うした。温和で物静かな性格であったと伝わるタリスは、時代の変化に臨機応変に対応していったのであろう。これを反映するかのようにタリスは、英語によるアンセムやラテン語のもてつなど、カトリックとプロテスタント双方のための楽曲を残している。

《スぺム・イン・アリウム(御身より他に)》はラテン語の歌詞による、40声部という大編成の楽曲である。「神より他に望みを託せる方はいません」と歌うこの曲の成立は、当時イギリスを訪れていたイタリアの音楽家アレッシンドロ・ストリッジョ(1536頃～92)が、自身の40声の楽曲を演奏したことが契機であったようだ。イタリア人による素晴らしい音楽を聴いて、イギリス人でこのような曲を作れる人物はいないのかという求めに応じてタリスが作曲した可能性がある。

この曲の全40声部は、5声部の合唱8組で構成されている。各声部の旋律が模倣的に現れながら、8つの組がさまざまな順序で応答してゆく。左側に続いて右側の合唱が、その次は中央の合唱が歌うなど、いろいろな場所から音が現れ、音響効果抜群の響きを生み出している。和声的に同じリズムで歌う箇所以外は、各声部すべてが相異なる旋律であり、対位的に巧みに組み合わせられているその様は驚くべきものである。中間部、および終結部の40声部全員で歌う箇所では音の響きに圧倒される。今回の演奏では全体で100人を超える合唱であり、さらなる豊かな響きが期待できる。

佐野 隆 TEXT by Takashi Sano

作曲: 1570年頃

初演: ロンドンにて

編成: 混声合唱

リヒャルト・シュトラウス (1864～1949)

交響詩《死と浄化(変容)》作品24

当時の作曲家としては珍しく大学に在籍し、哲学を学ぶ機会を得たリヒャルト・シュトラウス。20歳代半ばの作曲家が手がけた『死と浄化(変容)』という題材には、「死」の瞬間を怖れつつも憧れるという意味で、ショーペンハウアーの哲学と、その思想から生まれたワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》の影響が垣間見える。

シュトラウスはただ「死 Tod」を描くだけでは飽き足らず、その先に「浄化 Verklärung」という理念を置いた。評論家フリードリヒ・フォン・ハウスエグガーへの手紙には「非常に高い理想へと邁進するひとりの芸術家の死の瞬間を描こう」とした、と記されている。交響詩の主人公に擬せられたのは、自身の姿を反映させた「ひとりの芸術家」。後年、多くの作品で自画像的な作品を次々と発表するシュトラウスの作曲傾向は、すでにこの時期から芽生えていた。

ただ、後に出版されたスコア冒頭に掲載された詩は、ワーグナーの存在を教え、交響詩へとシュトラウスを導いたアレクサンダー・リッターが、作曲後に執筆・改訂したものである。作曲にあたり、かならずしも標題にこだわらずに全体を構築したのだろう。この時期のシュトラウスは、リッターに教わった標題音楽に少しずつ傾倒していたとはいえ、古典的な作曲様式と新しい概念をいかに組み合わせるか、試行錯誤した跡が窺える。

全体は4つの部分に分かれており、最初と最後の部分を序奏とコーダと考えれば、残りの二つの部分を、圧縮された展開部を持つ提示部と再現部、すなわちソナタ形式と捉えることが可能となる。序奏では病人の不規則な呼吸、小康状態を描く二つの主題が登場。提示部では激痛に呻く病人の苦しみ、生への執着、死後の「浄化」、少年時代の想い出を描く旋律群が加わり、これらが変形し、組み合わせられることで展開部へと向かう。

再現部の後、全管弦楽による浄化のモチーフを用いた爆発的な勝利の音楽は、シュトラウスがこの後、頻繁には用いることのなかったハ長調で描かれる。ベートーヴェン『交響曲第5番』のような、「逃走から勝利へ」のイメージを重ね合わせようとしたのだろうか。

広瀬 大介 TEXT by Daisuke Hirose

作曲：1888年～1889年11月

初演：1890年6月21日、アイゼナハ(一般ドイツ音楽協会総会)、リヒャルト・シュトラウス指揮

編成：フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、ハープ2、弦5部